

ペアレント・メンターの意識変容プロセスに関する研究

A Study on the Transformation Process of the Consciousness of Parent Mentor

南 方 正 之

Masayuki MINAKATA

山 崎 由可里

Yukari YAMAZAKI

(和歌山大学教育学部特別支援教育教室)

2019年10月15日受理

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the transformation process of the consciousness of parent mentors by method of analyses of Modified Grounded Theory Approach.

A semi-structured interview is carried out to 4 parents who have children with developmental disabilities, And they belong to association of parent mentor.

Before becoming a parent mentors noticed first the disorder of their own child and accepted this situation and the diagnosis result.

In such situation, they participate in the meeting of the parent for their own children. Parent mentors grow through various experience. Parent mentors would like to be even a little useful to similar parent and child of circumstances.

Parent mentors learned many things from various activity of a parent mentor. First parent mentors learned the posture which sympathetically listens to support other parents. Second, parent mentors acquired the relation of the person, wide information and knowledge by an exchange between a parent mentor and a workshop.

When touching their child, parent mentors could utilize the posture of listening. This experience was useful to touch their own child and correspond to the disorder of their own child. Parent mentors changed in order to have wider positive consciousness in various aspects.

I 課題意識

発達障害のある子ども(以下、発達障害児)の中には、養育環境や学齢期以降の学校生活などの環境との相互作用の中で、いわゆる二次障害を発症する者も少なくない(齋藤、2009)。また、子どもが二次障害を発症した場合、親も二次障害に苦しむわが子への対応に戸惑ったり、誰かに相談しようとしても相談する相手や機関が見つからず、悶々と悩み続ける例も見受けられる。

このようにさまざまな悩みを抱える親を支援するものとして、ペアレント・メンター(parent mentor; 親を導く・支援する人)がある。

ペアレント・メンターについて、井上は、まず「メンターとは『信頼のおける相談相手』という意味」¹としたうえで、「ペアレント・メンターとは、自閉症など発達障害のある子どもを育てる先輩の親が、同じ親という立場で現在困っている親の相談役となる人のことです。もちろん親であるメンターは専門家ではありませんから、自分の体験にないことや難しい相談を受けることはできません。しかし、ペアレント・メンターには専門家の相談では得られない特徴があります。それは同じ体験をしてきた親としての『高い共感性』と、

地域の教育・医療・福祉などのサービスを体験し、現状を理解した上での『ユーザー視点からの情報提供』です」²と説明している。また、ペアレント・メンターが様々な子育ての経験を相談者に提供することで、相談者の子どもの将来を見通しやすくするという利点もある。

以上のようなペアレント・メンターに関する先行研究は、アメリカなどの海外の動向の紹介(竹澤、2013)、ペアレント・メンターの入門書(井上ら、2011)、ペアレント・メンター活動の意義(藤田久美、2019)などが散見される。また、2014年～2015年にかけて47都道府県および19政令指定都市の計66か所を対象とした各自治体のペアレント・メンター養成研修の実施状況とペアレント・メンターによる支援活動の実態を調査した報告書(日本ペアレント・メンター研究会、2016年)がある。しかしながら、これらはペアレント・メンターを直接の研究対象とはしていない。

ペアレント・メンターに関する研究について、原口らは以下のように指摘している。「ペアレント・メンターによる親支援の有用性について、日本におけるエビデンスはほとんど存在しないので、その検証は急務で

ある。アウトカムとして、相談者である親や子どもへの影響のみならず、ペアレント・メンター自身への影響も含めた包括的な評価を行う必要がある。効果と同時に、相談を受ける側、メンター自身の両者へのネガティブアウトカム(例えば、ストレスの増加、精神的健康の悪化)について明らかにし、その予防や改善のためにペアレント・メンターによる親支援のあり方を検討することは重要である」³と。このようにペアレント・メンターによる親支援を検討する重要性は指摘されているものの、メンター自身の意識変容のプロセスに着目した研究は管見の限り見あたらない。

ペアレント・メンターは、わが子の障害を受容し、その経験のうえにペアレント・メンターを志す。ペアレント・メンターとしての活動を通して、同じペアレント・メンター、相談者、関連する人や機関などと相互作用を及ぼしている。

上述のようなペアレント・メンターの意識を形成し、変容させていくプロセスを明らかにすることは意義があると思われる。

II 目的

以上のような課題意識と先行研究の現状をふまえ、本論文ではわが子の障害を受容したうえで子育てをしているペアレント・メンターが、自分の子どもの障害と向き合い、日々奮闘している状況にあるなかで、「他の親を支援したい」と志した具体的な動機、ペアレント・メンターになった後の自身の意識や心情の具体的な変容について検討する。

そのために、具体的に以下の4点を課題として設定する。

- ①発達障害のある子育てを経験しているペアレント・メンターが、自分の子どもとどう向き合ってきたのか。ペアレント・メンターを志した動機を明らかにすること。
- ②発達障害児の親と関わり支援する過程において、支援対象の親にどのような影響や変化を与えたのか。

か。また、支援対象の親の子どもの変化についてペアレント・メンター自身がどう感じたかを明らかにすること。

- ③活動を通してペアレント・メンター自身の意識等がどう変容したのか。また、ペアレント・メンター自身の子どもにどのような影響や変化を与えたのかを明らかにすること。
- ④ペアレント・メンターの活動を通して直面した様々な課題を明らかにすること。そして、それらの課題を分類したうえで検討を加え、対処方法などを提示すること、である。

III 研究方法

4名のペアレント・メンター経験者に対する半構造化面接法による質的研究を行う。

1. インタビュー対象者(以下、「対象者」とする)

対象者は、ペアレント・メンター協会ならびに発達障害児の親の会に所属して3年以上の経験のある親4名である(表)。

2. データ収集方法

2018年7月～9月の間に半構造化面接法により、一人につき2時間～3時間のインタビューを行った。

3. インタビュー項目

- ①ペアレント・メンターが、自分の子どもの障害とどう向かい合ってきたのか。
- ②ペアレント・メンターを志した動機、意識。
- ③ペアレント・メンターとして活動した内容および活動する際の心構えと終えた後の感想。
- ④発達障害児の親と関わり支援する中で、その親や子どもにどのような影響や変化を与えたと思うか。
- ⑤活動を通してペアレント・メンター自身がどう変容したのか、自身の子どもにどのような影響や変化を与えたと思うか。

表 対象者の概要(調査実施時)

対象者				対象者の子ども				
	性別	年令	メンター 経 験	性別	年令	世帯 構成	職業等	診断名
A	母親	50代後半	4年	男性	17	父・母 姉・兄	高校生	広汎性発達障害 注意欠陥多動性障害
B	母親	50代前半	4年	女性	20	父・母 兄・兄	会社員	知的障害(軽度) ※境界域
C	母親	50代後半	4年	男性	19	父・母	福祉就労	知的障害(重度)
D	父親	60代前半	4年	男性	20	父・母	大学生	高機能自閉症

(注) 対象者Bさんの対象となる子どもは次兄と双子の関係にある。

⑥ペアレント・メンターに関する改善点と課題およびその改善方法。

4. 分析方法

得られたインタビュー・データは、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA: Modified Grounded Theory Approach)」を用いて分析を行った。

具体的な手順としては、まずデータに着目しそれを一つの具体例とし、解釈的な作業をしながら他の場合も説明できそうな概念をつくっていく。ここで生成された概念の定義、具体例を「分析ワークシート」に記入していく。具体例が増えていけば、この概念の説明力は高いと判断される。同時に、類似例や対極例などを検討し比較を行うことで、解釈が恣意的にならないように留意する。個々の概念について他の概念との関係を丁寧に検討していく。複数の概念を一つにまとめることで、カテゴリーを生成する。そしてこれら複数のカテゴリー間の関連性を検討して意味づけ、図式化を試みた。カテゴリーをストーリーラインに沿って並べ、カテゴリー相互間の関連を表した「カテゴリー間の関連図」(下図)を作成した。

5. 倫理的配慮

対象者に対してインタビューを行う前に、研究の背景と目的、方法、インタビューをお願いする理由、個人情報取り扱い等を文書と口頭で伝えた。合わせて、研究への参加は任意であり、参加に同意した後、いつでも同意を撤回できること、個人が特定できないように匿名性に留意することも文書と口頭で伝え、そのうえで、同意書に署名をいただきインタビューを実施した。

IV 結果と考察

本論文では、対象者の子どもの障害への気付きから、ペアレント・メンターの活動に参加し、活動を行うことで相談者等に影響や変化を及ぼしたり、対象者やその子どもの変容までを時系列に沿ってインタビューした。またインタビュー結果も時系列に沿って分析を行った。

ここではペアレント・メンターになる前となった後に分けて、個々のカテゴリーごとに説明を行う。

〈 〉内はカテゴリー、「『 』」内は対象者がインタビューで語った言葉である。また、『 』内は聞き手が語った言葉である。なお、語りはなるべくそのままの形で挿入し、わかりにくい箇所は()の中に言葉を補った。語りの後の()内は表の対象者に対応している。

1. カテゴリーごとの説明

(I)ペアレント・メンター自身の子どもの障害への気付きからペアレント・メンターになるまでのプロセス
(ア)〈子どもの障害への気付き〉

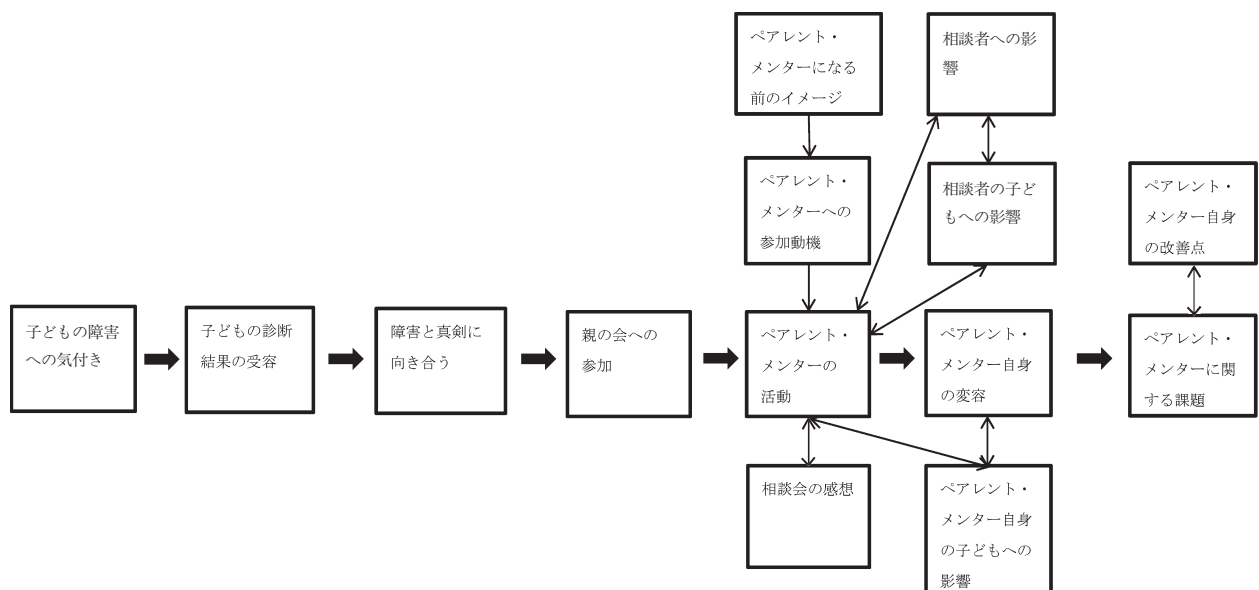
自分の子どもが他の子どもと違うと最初に思った時期は、生まれてすぐという親から、1歳半検診の頃、小学校入学後すぐ、中学校に入ってからという親に分かれた。

「初めての子どもだった。子どもを見る機会が無かった。こんなもんかなあと思うし、周りからも男の子はみんな遅いと言われていたので、遅いのかなあと思っていた」

「でもまだ何とかなるという気持ちはありました」
(以上Cさん)。

Cさんは初めての子育てのために、障害を真正面から受け止めるに力を使った。

カテゴリー間の関連図



「保健所の健診や病院の受診は母親がしており、小学校入学後すぐに、高機能自閉症と診断されたことも含め、父には報告されていた」

しかし、「担任の先生やことばの教室の先生や同級生などに恵まれて、大きな問題もなく小学校では過ごしました」(以上Dさん)。

父親のDさんもCさんと同様に初めての子育てだった。子育ては母親が中心に行っていたことと幼稚園や小学校の先生、同級生など周囲の支援などもあったので、この頃は障害について気に掛けることは少なかった。後述するが、中学生になって〈障害と真剣に向き合う〉ことになる。

「3人目(の子ども)なので、何でもそう神経質に取らないで、できない部分もまあいいかという感じでした」(Aさん)。

AさんもDさんと同様に周囲の支援があり、他の子どもとの違いを深刻に受け止めていなかったことが窺える。

「ガサガサするし、母の言うことを理解していないとか、ちょっとそんなのが見受けられました」

「保育所にあがる前ぐらいからちょっとおかしいなと思っていたけれど、どこでも別に、幼児検診では指摘受けることも無くきてた」

「保育園の時に『ことばの教室』というのがあるんですよ、そこへ相談を掛けようと思って保育所の先生に言ったら、『いやいやことばはわかるで』という感じで言われて、そこはスルーしました」

「でももう、明らかに小学校に入る前に数を教える時に、娘は兄と双子なので、一緒に教えても何かいっことも分かってない、ほんでおかしいなと思った」(以上Bさん)。

このように子どもの障害に早いうちから疑いを持っても、周囲の影響と自己判断の拙さから気が付きが遅くなったケースもあった。

(イ) 〈子どもの診断結果の受容〉

診断時期は2歳が1名、小学校1～2年が3名であり、いずれも大きな困り感が出てくる前であった。

「うちはてんかんの方が早かった(5歳の時)ので、それがすごい衝撃でした。てんかんは精神疾患に分類されているので、このことはずっと事実として消えない。納得はしていたけど、ショックな面がありました」

「(小学校)2年生位の時にメンタルクリニックに行ったら、その日に『広汎性発達障害とADHDに間違いないでしょう』と言われて、初めて診た先生にまで言われるくらい特徴的なものが出てるんやなと納得して」

「(てんかんの方が先だったので)発達障害自体はあまりショックじゃなかった。何とか支援してもらわなあかんのかなあぐらいにしか思わなかった」(以上Aさん)。

Aさんは、先に発症した別の病気のショックが大き

くて、発達障害の診断のショックは少なかった。

また、「母親に育児のことをものすごく言われた。お前のやり方が甘いと。わたしのやり方が悪いのかというしんどさはずっとあった。そういう状況だったので、診断された時はちょっとほっとしました。私のせいだけではない、やっぱりそうやったんや。安堵とかほっとした気持ちの方が強かった」(Bさん)。

一方、Bさんのように、子どもの困り感の原因がはっきりしたことで、逆に安堵感を得た親もいた。

また、前述のとおり、Dさんは小学校入学後すぐに妻から高機能自閉症の診断結果の報告を受けたが、小学校では子どもは周囲の支援などで不適応の程度が大きくならず、深刻に受け止めなかった。

(ウ) 〈障害と真剣に向き合う〉

年齢が上がるにつれて、不適応が顕在化してくる。時期としては小学校入学後が2名、中学校2年が1名だった。

「小学校に入ってからが、やっぱり適応できずにしょっちゅうパニックを起こした。皆と同じことはできないし、納得いかんかったら座り込む。学校へ行こうとせずに(親が)一緒に行かないと行けない状態が続いた」(Aさん)。

「中学2年の夏休み前に、急に強迫性障害の症状が出ました。主な症状は頻繁に手を洗うことです」

「これをきっかけに学校へいけなくなるのですが、小学校5年から今まで無遅刻・無欠席でしたので、急なことで大変戸惑いました」

「人生の中で最も大変な時期だったと思います」(以上Dさん)。

子どもの障害についての理解や情報収集などに真正面から向き合っていなかったツケが回ってくる。

子どもや親の困り感が大きくなってきた頃、障害について真剣に向き合うことになる。対応に苦慮し、大きな戸惑いを持つ。Dさんのように子どもの障害の対処のなかで、最も辛い時期になったと語った親もいた。

(エ) 〈親の会への参加〉

〈障害と真剣に向き合う〉状況になった時、「相談するところも、親同士の連携は少なかったので、(親の会に参加した理由は)まずそこですかねえ」(Aさん)。

「娘のことで凄く悩んでいても、同じ悩みを共有したり、相談できる人が無かった。小学校5年生の時に、チラシをもらって、あっ、こんな会あるんやと思って、行ったんがきっかけでした」

「周りに発達障害の女の子が少なかったんですよ。誰に相談やって、どんなにやっていってんやろとか思っていて、全然分からへんし・・・学校の先生に聞いたところで、やっぱりね、実際やってる人の話を聞きたいと思って」(以上Bさん)。

「2011年5月に設立した親の会に設立当初から参加しました。参加動機は息子と同じような生きづらさを

持った若者を支援したいというものです」

「設立の1か月後に、強迫性障害を発症しました。参加しようと思った時は、息子に対してというよりは、息子と同じような他の若者の支援が念頭にありました」

「でも今から考えると、昼でもカーテンを閉めてほしいと言い、外の様子を気にすることもありました。息子の変化を感じていたことが、無意識的に参加を促したのだと思います」(以上Dさん)。

子どもの障害と向き合わなければならない段階になって、少しでも和らげたいために様々な情報を得たい、同じ境遇の親の体験談を聞きたいなどの欲求に駆られる。しかし、相談する人や機関はすぐには見つからない。これらの共通した動機が、親の会への参加に結びつく。このことは、関連する本を読む、講演会に参加することで、役立つ情報を得るということと同列である。

また、Dさんは自分の子どもと同じような他の若者の支援をしたいという動機を持った。

(オ) <ペアレント・メンターになる前のイメージ>

ペアレント・メンター養成研修は、2010年から厚生労働省の発達障害者支援体制整備事業にも組み込まれて制度化された(加藤、2014年)。A県では、幾つかの親の会にペアレント・メンター養成研修の参加依頼があり、2013年6月にペアレント・メンター養成のための事前研修が始まった。

ペアレント・メンターになる前にペアレント・メンターを知っていた親が2名、知らなかった親が2名であった。

「ペアレント・メンターという言葉を知りましたので、どのようなことをする人かはイメージできませんでした」

「講習を受ける前に、関連する本を読んだことにより、障害者の親が同じ障害者の親に寄り添って、その親を支援する役割があることを知りました」(以上Dさん)。

「親の会でお友達とかに相談されて話しているように、自分の子どもの経験とか講演会等で勉強したことを伝えるというか教えてあげられたらいいかなというぐらいです」(Aさん)。

ペアレント・メンターを字面からだけではイメージができない親は、研修を受ける前に本を読んで勉強したことで、概要が分かった。

「NHKでペアレント・メンターの特集を見たことがあって、全国LD親の会でボランティア養成講座も受けました。そこにペアレント・メンターという名前ではないんですけど、似たような感じの講座もありました」(Bさん)。

「ペアレント・メンターの養成講座が所属した親の会にあった。私は受けてなかったんですけども、受け

られている方がありまして、相談にのる(ための)スキルをつける場所だということだけは、把握していました」(Cさん)。

ペアレント・メンターを知っていた親は、テレビの特集番組を見たり、よく似た養成講座を受講していた。また、所属する親の会で養成講座を受けられた方から情報を得られた親もあった。

<ペアレント・メンターになる前のイメージ>としては、障害者の親が同じ障害者の親に寄り添って、その親を支援するという漠然としたイメージは持っていた。

(カ) <ペアレント・メンターへの参加動機>

「所属している親の会から、(ペアレント・メンターになるように)任命された形です。『なってくれへんか』みたいな感じでした」(Cさん)。

このように、A県では、幾つかの親の会にペアレント・メンター養成研修の参加依頼があった。親の会に要請があり、軽い気持ちで承諾した。

「自分が相談できる人が欲しかったので、自分が相談する人になったら助かる人もある」(Aさん)。

「子どもが二次障害である強迫性障害に直面した時に、相談する機関や人がおらず苦勞しました。同じ経験を他の人にはしてほしくないと思いました。同じような境遇の親や子どもに少しでも役に立ちたいというのが心の底にある」(Dさん)。

自分の子どもについても、多くの労力と時間が掛かる状況の中、相談する機関や人がいなくて苦勞した経験から、同じ経験を他の人にはしてほしくないという思いは共通している。

自分が相談を受ける人になり、少しでも役に立ちたいという純粋な気持ちが表れる。

ただし、この時点ではペアレント・メンターになった後の展望はまだ想像できていない。

(2)ペアレント・メンターになった以降の自身の変容および周囲の者の変容のプロセス

(ア) <ペアレント・メンターの活動>

「活動としては、準備委員会と相談会とブロック会議、一昨年人権フェスタで(自閉症協会と共同で)啓発活動をしました」

「昨年、B市福祉担当者に母としての思いを話すという講演をしました。講演はこの1回だけです」(以上Cさん)。

「相談会、ブロック会議、活動が始まった当初2年間強は役員(監査)をしていたので、役員会及び研修の運営などもしました」(Dさん)。

A県の場合、主要な活動である相談会は、相談者とペアレント・メンターがそれぞれ複数で行うグループ相談会という形式で行う。ただし、相談会と仕事の時間と重なったため参加できない親(Bさん)が一人いた。

ブロック会議と研修会は参加頻度に差はあるものの全員が参加した。講演及び人権フェスタによる啓発活動は2名ずつ参加した。ペアレント・メンター協会設立前に準備委員会に参加した親、発足当初2年強役員を務めた親もいた。

リソースブック(地域の情報)の電子ファイル化については、主担当者として完成させた親もいた。

(イ) <相談会の感想>

「それこそ専門家の相談員さんにこんなせん方がいいとか、こうした方がいいとか、こうせんかったらあかんみたいな言われ方をしてしんどい思いを私しました。そうじゃないところでこんなはできんよね、こんなしんどいよねと伝えられるだけで、伝えて分かってもらえた時はすごく嬉しいです」(Aさん)。

「相談会も後半にかけて、相談者がよく話すようになり、生き生きとしてくるように感じます。終わる頃には来て良かったという表情が読み取れます。ペアレント・メンターも充実感が得られる瞬間です」

「相談者のアンケートでは参加して良かったという意見を多くいただき、やって良かったと感じました」(以上Dさん)。

相談会が終わった後の表情やアンケート結果から、相談者の満足感が伝わりと同時に、ペアレント・メンターにとっても活動の中で最も充実感を味わえる瞬間の一つとなる。

一方、ペアレント・メンター自身がしゃべり過ぎるという感想を述べた親もいた。

「アドバイスをする時に自身が専門家でないため、言えないことが沢山あることに息苦しさを感じています」(Cさん)。

このように自身の経験や経験から得た情報は話せるものの、専門家でないため解決策などを話すことには制限があることに不満の意見もある。

(ウ) <相談者への影響>

ペアレント・メンターが相談者に対して以下のような影響を与えていると感じている。

「一番大きいのはみんなと同じようにさせなければならぬと思って、ついつい(子どもを)怒ってしまうお母さんに、叱るよりもいいところを探して認めてあげるといふのを気づかせること」(Aさん)。

「違う人の話を聞いて、あっこういう道筋があるんだなと分かってもらえているんじゃないかなとは思いますが」(Bさん)。

「ペアレント・メンターの特徴である同じ親として共感し寄り添うこと、子育ての経験を提供する、経験から得た地域の情報を伝えることができたと思います」

「そのことで、障害者を育てている親の心を解きほぐせたり、提供した(子育ての)情報に喜ばれることができたと感じています」(以上Dさん)。

対象者は相談者にこういう考え方もあると知ってもらえることで、子育てや子どもとの向き合い方など支援のヒントを与えられたと感じていた。また、ペアレント・メンターの特徴である同じ親として共感し寄り添うこと、子育ての経験を提供する、経験から得た地域の情報を伝えることで、相談者の心を解きほぐせたり、提供した情報に喜ばれることができたという実感を得ていた。

相談者は、問題解決には至らないけれど参加して良かった、という思いを抱いてくれた。このような様々な取り組みが<相談者への影響>を与えた、と対象者は実感していた。

(エ) <相談者の子どもへの影響>

「(相談者の)お子様(に影響があるという)のことは考えて話していない」

「使える社会資源とかを教えることができた場合は、こういうことを使ってこんなことができる、手助けになるものがあるということを獲得される場合、子どもさん(にとっても)世間が広がるとか、お母さんがちょっと楽になるとか、そういう風に思ってもらえることもあるんじゃないかなと思います」

「(相談会では相談者が連れてきた子どもの保育をしているので)お母さんがちょっとの間でも子どもを見てもらえる時間があって、ちょっと息抜きが出来たら子どもに対して優しくなれる。そういう風に子どもに良い影響を与えられると思います」(以上Cさん)。

「注意して直していかないといけないという気持ちのあるお母さんに、叱るよりもいいところを探して認めてあげるといふのをしてくれてたら、それが重なっていくと、将来的に親子関係に信頼感が出てくると思う。それは伝えていかないと」

『親に気付かせることで、子どもに良い影響を及ぼすということですか』という問いに、

「そうです」答えた(以上Aさん)。

「難しいことだと思います。悩んでいる親に安心感を持ってもらえたり、心に余裕を持ってもらえることで、子どもの接し方が優しくなるのではないのでしょうか」

「間接的かも知れませんが、良い影響を及ぼすことができると思います」(以上Dさん)。

対象者は、相談者の子どものことを考えて活動する意識を持つまでには至っておらず、具体的で明確な影響は語られなかった。しかし、親の気持ちが楽になることで、子どもの接し方が優しくなるなど間接的な影響は与えられるのではないかと推察していた。その結果、<相談者の子どもへの影響>を与えられているという発言もみられた。

「親子を含めて兄弟支援も大切になってくる」(Cさん)。

相談者の対象となる子どもだけでなく、その子ども

の兄弟についての支援も必要であるという視点は、今後の家族支援を考える上で看過できないものである。

(オ) <ペアレント・メンター自身の変容>

「(ペアレント・メンターの経験を)全部が全部活かせていると思わないけども、ちょっと心掛けるとかそういう風にはなっていると思います」

「(自分の)子どもに対してもまず聞こうと思うようになりますね。聞いたげやなみたい(気持ちになります)。とはいっても、自分の子どもにはなかなか難しいですね。ペアレント・メンターの技術、研修会とかでロール・プレイングをやることによって、人との付き合いも結構スムーズにいくというのはあると思います」(以上Bさん)。

「同じ障害者の子どもの親に対して話を傾聴する姿勢を学べたことです」

「様々な人と関わり、知り合いになれたことで障害を持った親の支援について勉強できたことです」(以上Dさん)。

ペアレント・メンターの経験を全部活かせていると思わないけれども、色々な場面では活用できている部分を変容として受け止めている。特にペアレント・メンターの特徴である傾聴の姿勢については、様々な場面で実践するよう心掛けていることが大きな変容である。

「相談会に関しては、余り(変化は)無い」(Cさん)。

Cさんは、所属している親の会が独自にペアレント・メンターを養成していることもあり、相談会についての変化は感じなかった。

(カ) <ペアレント・メンター自身の子どもへの影響>

『お母さんがペアレント・メンター活動をしていることは分かっているのでしょうか。』という問いに「分かってないです」(Cさん)。

「これも難しい問題です。私の子どもは親の会に参加しているのは少し分かっているようですが、ペアレント・メンターについては私から詳しく話すこともなく、よく分かっていないと思います」(Dさん)。

「親の会行ってるイコールペアレント・メンター活動を多分同じように思っている」(Bさん)。

親がペアレント・メンターについてあえて説明していないこともあり、子どもは親がペアレント・メンター活動をしていることが分かっていない場合がほとんどである。

一方で「同じ障害者の子どもの親に対して話を傾聴する姿勢を学べたことは、息子の話を聞く時も同じことだと思います。その他にもペアレント・メンターの経験から学んだ知識や修得した技術などは、子どもと接する時に生かしていけると思っています」(Dさん)。

ペアレント・メンターの経験から学んだ知識や修得した技術などを、子どもと接する時に生かしているという回答もみられた。

「自閉症児としてそのまま大きくなってきた部分があるので、今からでも遅くないから何かしてあげようと思うのですが、彼は彼なりのやり方というのがある、変えられるのをすごく嫌がるので、何かしてあげようと思ってやり始めても拒否されて、折れてしまうという感じですかね」(Cさん)。

子どもの障害の状況により、わが子へ与えられた影響や変化に差はある。しかし、ペアレント・メンターの経験から得られた知識・技術を自分の子どもに生かすことで、<ペアレント・メンター自身の子どもへの影響>は良い方向に向かっていると感じている。

(キ) <ペアレント・メンター自身の改善点>

対象者の「もっとこうしたら良かった」という<ペアレント・メンター自身の改善点>について、以下のように語られた。

「グレーなお母さんが相談に来られる場所を作っておいてもらえるような。それは意図と違うかもしれないですけど」

「相談会だけじゃなくても、勉強会やその後座談会があってもいいのかなあ」

(以上Bさん)。

「確認したいことや疑問に思ったことについてもっと意見を言ったら良かったと思います」

「例えば、相談会・ブロック会議の運営方法などです。同じ曜日・時間に開催していることで、参加できる人が限られることです。最近は意見を言うようになりましたが、そういう人の存在も必要と感じます」(以上Dさん)。

対象者からは、発達障害であるとはっきりと分からないグレーなお母さんも対象になる相談会や相談会以外の勉強会(その後の座談会を含む)開催の提案がなされた。活動・運営についてもっと意見を言ったら良かったと語られた親もいた。

経験と活動を重ねていくうちに、もっと活動に参加したい、もっと建設的な意見を述べたいなどの欲求がつのる。これらはペアレント・メンター協会とその活動をより良い方向に導きたいという思いの発露であると考えられる。

(ク) <ペアレント・メンターに関する課題>

「仕組みがもう一つ会員にも分からないんですよね」「組織的なものも、システム的なものも」(以上Bさん)。ペアレント・メンター活動を行ううえでの、ペアレント・メンター協会の組織に関する課題が挙げられた。

役員会に参加する役員と会員の間では情報量に大きな差があることから、役員の経験が無い会員は、組織全般について余り知らされていない。情報が少ないことで、組織や活動が分からないという不信感が生じる。

「会員の意識・考え方の違いや研修への参加回数が異なる中で、会員が同じ意識を持ち、同じ活動ができていないこと」

「発足経緯が上からの依頼という形なのも影響しているかも知れません。しかし、各人が参加すると決めたにもかかわらず、やらされ感を持っている人が少なからずいる」

「また、そういう人達の意識を変えるというのは、とても難しいことです」

「このことは、相談会の活動にも表れています。基本である傾聴よりも、問題解決のために喋り過ぎる会員もいます。そういう人達についても、簡単に意識は変えられません」(以上Dさん)。

会員自身に内在する課題も指摘された。このことは組織としての在り方の課題とも関連している。簡単には変わらないという気持ちが覗く。

V 結論

1. 子どもの障害の受容から、ペアレント・メンターを志す動機

対象者は、まず発達障害の自分の子どもと向き合い受容し、そしてその延長線上にペアレント・メンターへの参加や活動がある。

障害の受容については、わが子が他の子どもと少し違うことに気付くことが発端であった。程度の差こそあれ、この時点では「子育てが初めて」という理由などから経験、知識や情報が不足していた。また「でもまだ何とかできる」という楽観的な気持ちが支配していた。日常生活への不適応がまだ大きく表れていないこともあり、敢えて子どもの障害に気付こうとしない、向き合おうとしない心情が窺われる。

すべての対象者の子どもは、不適応が大きくなっていない比較的早い段階に医療機関を受診し診断を受けた。また、対象者は診断結果を「ショック」と受け止めているとはかぎらなかった。その理由は、先に発症した別の病気のショックが大きいため緩和されたケースや、母親から育児のやり方が悪いと言われた親は、子どもの困り感の原因がはっきりしたことで、逆にほっとした、安堵したためである。教育や医療について主として母親が担当していたケースでは、幼稚園、小学校、クラスメイトとそのお母さんなど周囲の者を含めた環境に恵まれて、子どもの困り感が大きくならなかった。そのため、対象者である父親は妻から診断報告を受けた時には、その結果を深刻に受け止めなかった。

子どもの年齢が上がるにつれて、勉強や学校生活でのレベルも上がり、不適応が顕在化してくる。対象者の中には、今まで障害と真剣に向き合っていなかったのが、急に向き合わざるを得なくなった者もいた。子どもの障害と真剣に向き合うことになる時期としては、小学校入学後が2名、中学校2年が1名だった。それは子どもの教育環境が変わった時期と重なる。

中学2年の夏休み前に強迫性障害の症状が出たケー

ス(Dさん)では、小学校5年からその時まで無遅刻・無欠席だったのに、強迫性障害を発症しそのことが原因で中学校卒業まで不登校となる。Dさんは人生の中で最も大変な時期となったという感想を持った。

以上のように子育ての過程で、何らかの対応に迫られることになったものの、相談できる人や機関が無くて困ったと感想を持った者が3名いた。

真剣に向き合わなければならない子どもの障害と出会い、近くに相談できる人や機関が無い状態が続く中、この頃に全員が発達障害児の親の会に参加した。参加動機は、同じ悩みを共有したり、相談したいという欲求、様々な情報を得たいということにある。

2010年には、厚生労働省の「発達障害者支援体制整備事業」により、「発達障害児(者)の親が、発達障害の子を持つ親に対して心理的な支援を行うペアレントメンターの活動の推進……により、発達障害児(者)及びその家族に対する支援体制の一層の充実を図ることとしている」⁴(厚生労働白書, 2010年)と明記された。このことがきっかけとなって、2013年にA県も県の事業としてペアレント・メンターの養成の取組みを始める。具体的には、幾つかの親の会にペアレント・メンターの養成の依頼があり、親の会所属会員の中で希望する会員がペアレント・メンターになるための事前研修と養成講座を受講したうえで、ペアレント・メンターとして登録する手順がとられた。

愛知県のようにペアレント・メンターが自発的に立ち上げた例もあるけれども、A県では県主導でメンターの養成が始まったという経緯があった。ペアレント・メンターに参加するかどうかは各人の自由意思に基づくものであった。

以上のようにペアレント・メンターを志す動機は、第一に子どもの障害と真剣に向き合った経験から得られた考え方や心情が大きく影響しており、第二に子どもの障害に直面した時、相談する機関や人がおらず苦勞し、同じ経験を他の親にはしてほしくない、同じような境遇の親や子どもに少しでも役に立ちたいという純粋な気持ちが根底にあった。

2. 支援対象の親およびその子どもへの影響や変化

相談会も後半にかけて、相談者がよく話すようになり、生き生きとしてくる。終わる頃には来て良かったという表情が読み取れ、終了後はほっとした顔で帰られる方が多いなど、対象者は相談会の様子から、同じ親として共感し寄り添うことで、相談者の心を解きほぐせたと感じたという。同じ障害の子どもを持ったペアレント・メンターや相談会に来られた他の親が自分と同じ悩みや不安を抱えていることを感じとり、自分だけではないということを知ることが大きい。

子育ての経験を提供することで、相談者に様々な考え方があっても知ってもらえる。少し視点を変えた

り、違う考えがあることが分かることで、随分と視野が広がる。

ペアレント・メンターは、自らの経験から得た地域の情報を伝えることで、相談者の支援に繋がる情報に喜ばれたこともあった。

以上のように、対象者は、相談活動によって相談者に安心感や多様な視点をもたらすような良い影響や変化を与えたと実感していた。

次に相談者の子どもへの影響や変化については、対象者も実際の活動の中で、相談者の子どもの影響まで考えて話していなかった。しかし、例えば、「注意して直していかないといけない」という気持ちのあるお母さんに、叱るよりも子どものいいところを探して認めてあげるというのを気付かせることで、相談者の子どもに良い影響を及ぼすと対象者は感じていた。

悩んでいる親に安心感を持ってもらえたり、心に余裕を持ってもらえることで、相談者は子どもへの接し方が優しくなる。このように間接的であるけれど、良い影響を及ぼしていると対象者は推察していた。

3. 活動を通してのペアレント・メンター自身および自身の子どもの変容

対象者たちは、ペアレント・メンターとして経験したことを様々な場面で活かしている。特にペアレント・メンターの特徴である傾聴する姿勢を学べたことが良かったという点で一致していた。傾聴はペアレント・メンターに限らず、すべての場面で必要となる基本的な態度である。このことは、相談者や相談を受ける者が誰であれ変わらない。ペアレント・メンターの相談会、親の会で相談を受ける場合、自分の子どもに対しても同様である。

様々な研修により、大学教員、行政機関や福祉機関の方々の最新の情報や知識に触れたことや、障害の内容や程度が異なるペアレント・メンター会員相互の交流により、多くの有益な話を聴くことができたのも有意義なことであった。

ペアレント・メンターになったことで得られた多くの経験、知識や情報が、これからの人生を良き方向へ導く羅針盤になった。これら多くのことが、対象者を前向きな方向に変容させたといえよう。

対象者たちは、わが子にペアレント・メンターについて詳しく説明していなかった。説明しているケースでも、子どもは親の会の活動とペアレント・メンターの活動を同じだと思っており、自身の子は親がペアレント・メンター活動をしていることが分かっていないという。

対象者たちは、ペアレント・メンターの活動を通して、自身と自身の子どもに向き合う意識の変容について以下のような影響を感じていた。第一に、同じ障害者の子どもの親の話を傾聴する姿勢を学べたことは、

自身の子どもの話を聞く時も同様に傾聴するように変化したことである。換言すれば、親の会に参加し、相談会に関わることで、自身の子どもの姿勢も変化したということである。第二に、傾聴の姿勢以外にもペアレント・メンターの経験から学んだ知識や修得した技術などは、子どもと接する際に活かされていることである。

以上のような変容は、ペアレント・メンターになったからこそのものであり、対象者たちは、ペアレント・メンターの活動が自身の子どもにも好影響を与えていると感じていた。

4. ペアレント・メンターに関する課題と提言

ペアレント・メンターの経験を積み重ねるにつれて、対象者たちは周囲の様々な状況が少しずつ分かってきたという。その中で幾つかの気になる課題が浮かび上がってくる。会員相互のコミュニケーションが少なく、この話題を話し合う機会が少ないことも一つの要因である。

対象者が感じている課題は、ペアレント・メンター協会の組織、会員や活動と様々である。ペアレント・メンター協会やその活動を良くしたいという思いから発せられた内容であり、傾聴に値する。

以下では、インタビューの中で指摘された様々な課題を分類し、私見を述べる。

(1)組織

ペアレント・メンター協会の組織や仕組みが分からない、分かりづらいことがあげられた。第一に役員を経験したものとそうでない者で組織や仕組みに関する情報量に差があることである。役員を経験することで、役員会を通じて他の役員や関連する機関の担当者と交流し、組織や仕組みを勉強できる。この課題をあげた親は、役員未経験者である。

この親と同じ思いのペアレント・メンターは対象者以外にもいる。今後、協会の組織と仕組みについて研修会等で説明する機会を設ける必要がある。

第二に役員と末端の会員との間で情報量に差があることである。役員は役員会で様々な情報を得、また役員間相互のメールシステムでも情報を共有する。一方、役員でない会員は、ブロック会議にて各ブロックのリーダーから役員会での情報等の説明を受ける。ブロック会議の開催は年数回であり、相談会開催の打ち合わせなどが中心になり、得られる情報は少ない。今は役員でないが、役員を経験したDさんは、役員か役員でないかで情報量の差があることを肌で感じたと言っていた。

(2)会員の意識

会員の意識についての課題が挙がった。会員の意識や考え方に違いがあるのは、当然のことである。具体的に言えば、各人が自由意思でペアレント・メンター

に参加すると決めたにもかかわらず、やらされ感を持っている親が少なからずいる。

このことが課題として挙がる原因は、会員の意識や考え方に違いがあることはもちろんであるけれど、発足経緯が会員の自発的な取組みではなく、県からの募集依頼ということが、やらされ感の一因と考えられる。

また、組織のあり方とも関連している。当ペアレント・メンター協会は法人格を取得していない。町内会やPTAといった組織と同じで、会員相互の結びつきが弱い組織と言える。簡単な規約しかなく、目に見える客観的な目的に乏しく、代表者のもとに各地域のリーダーがいるが、命令系統は薄い。

このような状況の中で会員の意識を変えるというのはとても難しい話であるが、障害のある子どもを抱えながらも、同じ境遇の親を支援したいという純粋な考えをみんな持っているので、時間を掛けて粘り強く話し合うことが必要であると思われる。

(3)活動

(ア)活動範囲

まず、ペアレント・メンターが主として行うべき活動かそうでない活動かを見極める必要がある。ペアレント・メンターは関連する機関から講演を始め様々な依頼を受け、活動している。活動することで貢献できたことは良いが、研修終了の条件として受講する方もおり、講演した会員は終了後の質疑応答でありきたりの感想しかもらえなかったと漏らした。例えば、障害者の親の経験を話すという依頼であれば、ペアレント・メンターでない他の親でもよい。

関連機関からではなく、直接依頼がある場合は、依頼内容を吟味したうえで受けるかどうか判断するはずである。同様に関連機関からの依頼の場合にも様々な観点に基づいて判断すべきである。

これに関連して、最近は事務上の手続の負担も増える傾向にある。ある親は、企画、活動面はペアレント・メンターが主体性を持って行うが、事務面は関連機関で負担してほしいと語った。

(イ)相談会

相談会全般に関する課題は、相談会の運用方法と回数の増加要望である。

対象者から、相談会での反省として、自分がしゃべりすぎるという課題を3名が挙げた。相談会に参加したスーパーバイザーから、反省会でしゃべりすぎを指摘された一部の会員もいる。

相談者の話を傾聴することで、共感し、寄り添うというペアレント・メンターの最も重要な特徴が生かされない状況が起きているならば、ペアレント・メンター自身の改善が求められる。

(ウ)啓発講座

Cさんは啓発講座の原稿を作成する時や聞き手に向かって話をする時に、過去のつらいことを思い出すこ

ともあるので、それに対するケアが必要だと語った。ペアレント・メンターとして活動するなかで、ペアレント・メンター自身の心が疲弊しては意味がない。このような時にバックアップしてくれる専門員や専門機関の存在が重要となる。当ペアレント・メンター協会でも、幾つかの外部の関連機関と連携しているが、ペアレント・メンターの精神面を支えることについて話し合いが持たれたことは無いと記憶する。

対象者たちは上記のようなさまざまな課題意識を持っていることが明らかになった。これらの課題を解決して行くには、まず、ペアレント・メンター会員全員が各会員の課題を共有し、話し合うことが重要である。それにより、課題に対する最良の解決策が得られ、そうすることで会員の意識や活動を良い意味で統一できる方向に向かわせる。

VI まとめと今後の課題

ペアレント・メンターの意識変容のプロセスは、総じていえば以下のようである。

対象者であるペアレント・メンターは、ペアレント・メンターになる前から子どもの障害に気付き、受容することから始まり、診断結果を受け入れ、その後障害と真剣に向き合うことになる。このような状況のなかで、子どもの障害により良く対応するため親の会に参加し、ペアレント・メンターを志す意識が芽生える。すなわち、子どもの障害に直面した時、相談する機関や人がおらず苦労した、同じ経験を他の親にはしてほしくない、同じような境遇の親や子どもに少しでも役に立ちたいという純粋な気持ち(動機)が根底にある。そして、ペアレント・メンターになり、様々な活動に参加し、支援対象の親から参加して良かったとの感想を寄せられることで、子育てで悩みを抱く親たちに役立ったという喜びを実感するようになる。そして、ペアレント・メンター活動を通して、支援対象者の親の話や自身の子どもを傾聴する姿勢を身に付け、ペアレント・メンター同士の交流や研修会により人の繋がりが幅広い情報、知識を習得することで、自身の子どもやその障害についてのみならず様々な面でより幅広く、前向きな考えや意識を持つように変化している。

今回はペアレント・メンター自身の意識や心情の変化を研究対象とし、併せてペアレント・メンター活動の課題(問題点)やその解決策について若干の提案を行った。今後の研究課題としては、ペアレント・メンターに相談等をする側である障害児の親を対象として、支援を受ける前と後における子育てや障害受容、子どもへの意識などの心情の変容を検討し、ペアレント・メンターの有効性や課題を明らかにすることが挙げられる。これらの検討については他日を期したい。

謝辞

本研究に際し、長時間にわたり快くインタビューに応じてくださいましたペアレント・メンターに心より感謝申し上げます。

〈注〉

- 1 井上雅彦・吉川徹・日詰正文・加藤香編『発達障害の子どもをもつ親が行う親支援』学苑社, 2011年, p.6.
- 2 井上雅彦「ペアレント・トレーニングとペアレント・メンターを生かした家族支援」『サポート：知的障害福祉研究』第64巻12号, 2017年, p.56.
- 3 原口英之・井上雅彦・山口穂菜美・神尾陽子「発達障害のある子どもをもつ親に対するピアサポート：わが国におけるペアレント・メンターによる親支援活動の現状と今後の課題」『精神保健研究』28号, 2015年, p.53.
- 4 厚生労働省『平成22年版厚生労働白書』2010年, p.351.

〈参考文献〉

藤田久美「発達障害児の母親と共に創る子育てコミュニティの創造：ペアレントメンター養成にかかわる実践をもとに」『山口県立大学学術情報』第12号, 2019年

本田浩子・斉藤恵美子「発達障害者の親の負担感に関連する要因の検討」『日本公衆衛生雑誌』第63巻5号, 2016年

加藤香「親による親のための相談者：ペアレントメンターによる支援」『月刊地域保健』第45巻11号, 2014年

木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い』弘文堂, 2003年

木下康仁『分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂, 2005年

日本ペアレント・メンター研究会「ペアレント・メンターの養

成及び活動の実態に関する報告書」, 2016年

中川薫「重症心身障害児の母親の「母親意識」の形成と変容のプロセスに関する研究－社会的相互作用がもたらす影響に着目して」『保健医療社会学論集』第14巻1号, 2003年

中川薫「『子と自分のバランスをとる』－重症心身障害児の母親の意識変容の契機とメカニズム」『保健医療社会学論集』第15巻2号, 2005年

中鹿彰「アスペルガー症候群を伴う児童への心理臨床的支援」『追手門学院大学心理学部紀要』第6巻, 2012年

中山智哉・渡邊望・春高裕美・基山徹哉「母親の育児感情に影響を及ぼす要因の探索的検討－母親育児方法・育児への省察および保育相談支援との関連」『九州女子大学紀要』第50巻2号, 2013年

緒方明子・宮本信也・伊藤拓・石橋悦子・小野次朗「二次障害を防ぐために」『LD研究』第22巻1号, 2013年

戈木クレイグヒル滋子『質的研究方法ゼミナール グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ』医学書院, 2005年

齋藤万比古編『発達障害が引き起こす二次障害へのケアとサポート』学習研究社, 2009年

鈴木江利子・中垣紀子「在宅で学童期から思春期にある障がい児(者)を育てている父親の体験」『日本小児看護学会誌』第27巻, 2018年

竹澤大史「ペアレント・メンター－日本とアメリカの活動紹介－」『アスペハート』第12巻1号, 2013年

八重樫大周・奥野雅子「発達障がいを抱える家族への支援プロセスに関する一考察」『現代行動科学会誌』32号, 2016年

吉田弘道・山中龍宏・巷野悟郎・太田百合子・山口規容子・牛島廣治「育児不安尺度の作成に関する研究－因子間相関について－」『専修人間科学論集心理学篇』第4巻1号, 2013年